

「伝承」と「創造」の教科横断的カリキュラムの開発Ⅱ

—教科横断による教科融合の検討—

花坂 歩・衛藤 俊明・釘宮 泰代・河野 晋也

Development of a Cross-curriculum that Creates "Tradition" and "Creation" II :
Consideration on Subject Fusion Caused by Crossing Subjects

HANASAKA, A., ETOU, T., KUGIMIYA, Y. and KOUNO, S.

大分大学教育学部研究紀要 第44巻第1号

2022年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 44, No. 1, September 2022

OITA, JAPAN

「伝承」と「創造」の教科横断的カリキュラムの開発Ⅱ

—教科横断による教科融合の検討—

花坂 歩*¹・衛藤 俊明*²・釘宮 泰代*³・河野 晋也*⁴

【要 旨】 豊後大野市立菅尾小学校は令和3年度にジオパークを活用した教科横断的な授業開発に取り組んだ。本報告では、その内、第2学年から第6学年までの指導案を取り上げ、その教科横断性・融合性を検討している。結果、教科横断が学校全体のカリキュラムマネジメントの1つとして推進されていることを確認し、かつ、教科融合は教科横断によって生まれる偶発的現象であるという仮説を得るに至った。その他、ジオパーク学習と「相性の良い教科・領域」、「相性の良くない教科・領域」を提案している。

【キーワード】 教科横断 ジオパーク教育 カリキュラムマネジメント

I はじめに

豊後大野市立菅尾小学校では、平成30年度と31年度(令和元年度)にキャリアプランニング学習の研究開発に取り組み、令和2年度には「郷土教育」と「地域人材の活用」の充実を主軸とした総合的な学習の時間の研究開発に取り組んだ。中核にあるのは郷土を守る人材の育成である。そして、令和3年度には、「おおいた豊後大野ジオパーク」(日本ジオパーク認定)を学習素材にした教科横断的な単元開発によって、新しい知を生み出す人材の育成方法を模索している。本稿で報告及び考察するのは、その内、各学年で実践された教科実践についてである。

II 横断的・融合的な教育課程の構築

1 各学年、各教科における教科横断・融合の工夫

「ジオパーク教育」や「郷土教育」、「キャリア教育」のように、教科内容を超えたテーマを

令和4年5月20日受理

*1 はなさか・あゆむ 大分大学教育学部言語教育講座(国語科教育)

*2 えとう・としあき 大分市立三佐小学校・校長(前・豊後大野市立菅尾小学校校長)

*3 くぎみや・やすよ 豊後大野市立菅尾小学校・教諭

*4 こうの・しんや 大分大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教科教育)

※本稿は豊後大野市立菅尾小学校にて開催された「公開研究発表会」(2021年11月18日)での口頭発表を経て、その一部をまとめたものである。

学校全体の研究テーマに掲げた場合、各学級担任においては、「全体」（学校全体の教育課程）と「部分」（学級の年間指導計画）の往還が求められる。担任は、年度当初にジオパークと関連させた「総合的な学習の時間（もしくは生活科）」の単元プランを学校の教育課程と照らし合わせながら構想した。その上で、各教科の年間指導計画、授業時数、学習環境、指導体制、各教科・領域との関連等といった細部の検討を試みた。加えて、研究主任（釘宮）が学習指導案の具体例（資料1）を全教員に示し、具体化の共通理解を図った。

以下に報告する「1）他教科との関連についての記載」では、第2学年国語科、第3学年英語活動、第4学年理科、第5学年理科、第6学年国語科の指導案を取り上げ、菅尾小学校がどのように教科横断・融合を図っていかうとしていたのかを報告する。続く、「2）単元観及び指導観についての記載」では、特に、第2学年と第6学年の国語科を取り上げ、その単元観・指導観を詳細に報告する。

1）他教科との関連についての記載

本項では、教科横断的な授業開発が学校全体での取り組みであったことを各学年から提出された指導案をもとに示す。以下、下線は稿者による。

○第2学年・国語科（単元名：おにでんせつのつづきを作ろう）

2年生の生活科では、校区内にあるジオサイト（菅尾磨崖仏）を訪れ、これからのジオパーク学習を積極的に取り組む姿勢の涵養を試みている。訪れた菅尾磨崖仏は、2年生の子どもたちにとっては「お迎え遠足でよく訪れる場所」であるが、それまで、町探検の視点をもって訪れたことはない。生活科の「まちが大すきたんけんたい」の学習を踏まえることで、「磨崖仏近くの大きな木は、山を守っているのかも」、「この小さな祠は磨崖仏を作った鬼に感謝しているのかも」といった発展的な想像が期待できる。国語科では、そうした想像を糸口に、自分たちの聞いてきた「菅尾の鬼伝説」と、子どもたちの観察成果を融合させたい。子どもたちの想像は自由である。自分たちが見た菅尾磨崖仏の様子と町の様子、自分の記憶を思い出しながら、伝説の続きを考える活動を行う。

1学期の国語の学習では、神話や伝承、昔話について学習した際、自分たちの身近な場所が伝承になっているということに、子どもたちはとても喜びを感じていた。伝説の続きを自分たちで作り上げることで、さらに自分たちの郷土に興味を持ち、親しみを感ずることが期待できる。

この国語科の単元では生活科との横断的接続が試みられている。生活科では、「まちが大すきたんけんたい」（14時間）という単元を経験し、その後、ジオサイト（菅尾磨崖仏）を訪れている。生活科で養った「町」という視点を踏まえて菅尾磨崖仏を見ることで、菅尾磨崖仏が自分たちの「町」の一部であるという認識を強めることになる。国語科の授業では、「菅尾の鬼伝説の続きを考える」という言語活動が試みられた。上掲の「学習を踏まえる」、「発展的な想像が期待できる」、「そうした想像を糸口に」からは、授業担当者に教科横断的発想が芽生えつつあることが確認できる。最後に書かれた「伝説の続きを自分たちで作り上げることで、さらに

自分たちの郷土に興味を持ち、親しみを感ずることが期待できる」からは、通常的生活科や国語科の学習に収まらない新たな学習、すなわち「自分たちの郷土」を学習素材にした国語科の学習、が複数教科の接続によって生み出されようとしていたことがわかる。

○第3学年・英語活動 (What's this?)

3・4年合同で市内7か所のジオサイトをめぐっているが、事前に図書館資料やインターネットで調べ学習をおこない、見学後には、一人一人が興味を持ったジオサイトをレポートにまとめることができた。また社会科では、豊後大野市でとれる農作物を調べてきた。

特色ある地形と豊かな土壌に恵まれた豊後大野市に愛着とさらなる興味、関心を高める活動へとつなげていきたい。英語活動では、ジオサイトや市内でとれる農作物の英語の言い方を知り、何であるかを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しんでほしいと考えている。

この単元は、総合的な学習の時間の「ジオサイト見学をしよう」(11時間)と社会科の「地域とつながる野菜作り」(4時間)を踏まえ、英語活動への接続を試みたものである。上掲の「英語活動では、ジオサイトや市内でとれる農作物の英語の言い方を知り、何であるかを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しんでほしい」からは、英語活動の表現内容が日常の学習生活から取り出されていることがわかる。これは教科を超えた結び付けであり、上述の第2学年の国語の単元構造よりも教科数が増えている点でより高度であると言える。さらに、「特色ある地形と豊かな土壌に恵まれた豊後大野市に愛着とさらなる興味、関心を高める活動へとつなげていきたい」という教師の願いからは複数教科の接続によって郷土愛の涵養に結び付けようとしていることがみてとれる。

○第4学年・理科 (土の粒と水のしみこみ方の関係を調べよう)

ジオサイト学習では、3・4年合同で市内7箇所のジオサイトを巡り、地質や特徴、それらの歴史について歴史資料館やジオガイドの方から詳しく話を聞き、現地で体感しながら学ぶことができた。また、見学後学んだことを意欲的にメモにとったり、他のジオサイトにも興味をもって調べたりすることができた。

4年生では理科の学習で雨水のゆくえの学習を行う。雨が降った後にあらわれる水たまりは、高いところから低いところへ流れていくこと、地面にしみこむこと、そして、蒸発して水蒸気となり空気中に出ていくことを学習する。その現象は自分の身の回りで起こる自然の現象であり、身近にあるジオサイト江内戸の景から見える大野川においても、雨水のゆくえと同じ現象が起きていることに気づかせていきたい。

この理科の単元では雨水のゆくえが学習内容であった。学習に先立つジオパーク学習(総合的な学習の時間「滞泊峡・出会橋・轟橋などについて調べよう」(7時間))では、理科で学ぶ「雨水のゆくえ」以上のスケールで自然を学習している。これは、教科と教科の「接続」とい

うよりは、「前景・背景」といった位置関係をもつ教科横断性である。子どもたちは教科書よりも大きなスケールで郷土を知りつつ、教科書からその細部を学ぶのである。

○第5学年・理科（流れる水のはたらきと土地の変化）

5年生のジオパーク学習では、ジオガイドから豊後大野市の地質的特徴について学習したり、現地学習を行ったりすることで、本物に触れながら体感的に学んできている。また、防災の専門家の講演を通して、これまでの豊後大野市で起きた災害を知り、防災についての興味関心が高まっている。社会科では、日本各地で自然災害が起きていることや、自然災害から暮らしを守るために様々な取り組みが行われていることを知ることで、自分の地域の取り組みを見つけたり考えたりできるようになってほしい。また理科では、流れる水の働きや土地の変化の視点から地域を見つめることで、災害が起きる原因を理解するとともに、防災意識をさらに高めてほしいと願っている。

自然と共に生きている私たちは、自然災害とも向き合っていかなければならない。ジオパーク学習と社会科、そして理科を関連させて教科横断的な学びを実現させることを通して、身近な自然（地域）と共に生きていく方法や自然とどう関わるかについて考えることのできる子どもに育ててほしい。

この単元は「教科横断」というよりは、「教科分担」といった構造をもっている。上述の第3学年の英語活動の学びは、総合的な学習の時間と社会科で学んだことを英語で表現するというものであった。そこに教科内容としての重なりは乏しい（「ジオ」や「農作物」は必ずしも英語で学ばなければならない内容ではない）。しかし、この理科の単元では、「防災」というキーワードにそれぞれが複雑に関連している。ジオパーク学習（総合的な学習の時間「豊後大野市の防災」（10時間））では専門家から防災についての講演を聞き、社会科では日本各地の災害を知り、そして理科では、災害を引き起こす自然の摂理を学ぶ。防災をテーマにした多角的な学びと言ってもよい。もちろん、それらを統合する必要があるため、学習者にはより高度な思考が求められよう。

○第6学年・国語科（人を動かす防災ポスターを作ろう）

ジオパーク学習では、ジオサイトをめぐって豊後大野の地質の特徴を豊後大野市の防災・減災について、ゲストティーチャーを招いて話を聞いたり、防災マップを活用して避難経路を確認したりする活動を行う。さらには、社会科で地域社会の課題解決と政治の関わりを学ぶことにより、災害に対する当事者意識をもたせていく。加えて、国語科では、ジオパーク学習や社会科で得た「防災・減災の知識や情報」を活用し、自分たちで調べたことをまとめ「防災ポスター」として地域へ発信する活動へつなげる。

解決困難な課題に取り組むことが重要視される今の時代において、「災害」をテーマにした学びは子どもたちにとって身近であり必要不可欠なものである。ジオパーク学習と社会科、そして国語科を関連させて教科横断的な学びを実現させることを通して、

地域（ジオパーク）と自分との関わりについて自分なりにとらえ、これからの地域や自分のあり方について考えを深めるだけでなく、豊かな人間関係を築くことができる子どもたちに育ってほしいと考えている。

この単元は、総合的な学習の時間の「豊後大野市の防災について考えよう」（8時間）と社会科の「自然災害を防ぐ」（3時間）を踏まえ、国語科単元への接続を試みたものである。国語科における表現内容が日常の学習生活から取り出されており、上述の英語活動に見られた教科横断性と類似した構造となっている。

2) 単元観及び指導観についての記載

本項では、特に第2学年と第6学年の国語科の指導案を取り上げ、より詳細に単元観・指導観を検討する。

○第2学年・国語科（おにでんせつをつづきを作ろう）

本単元では、地域に伝わる菅尾磨崖仏の鬼伝説を基に、実際に自分たちが見たり調べたりした磨崖仏についての資料から伝説の続きを想像し、紙芝居で表すという言語活動に取り組む。磨崖仏とつながるようなお話の続きを書くには、自分自身の体験を思い出しながら、適切な接続表現を用いる必要がある。身近な文化財から自由に想像を広げることの楽しさや、互いの想像を交流する喜びを味わわせ、自分たちの地域の文化財へ興味・関心をもつきっかけになるようにしていきたい。

本単元の導入（1時間目）では、地域の文化財への興味・関心を強めるために、地域の方に、「菅尾磨崖仏の鬼伝説」の読み聞かせをしていただく。その際、「鬼はどこへ行ったんだろうね」「村は平和になったのかな」「お坊さんはどうなったのかな」など、お話の続きに興味をもてるような声掛けをするとともに、読み聞かせの方に「お話はここまでだけど、続きが気になるね。ぜひ、続きを考えてほしいな。」と投げかけていただき、お話の続きを考える学習へと促す。また、1学期に、神話や伝承・昔話について学習したことを思い出させ、菅尾地域の史実や様子につながるようなお話を作ることを共有する。そして、「もし鬼が今の菅尾に戻ってきたら、どこでどんなことをするかな」と問いかけ、現在の菅尾地域に繋がるような話を作れるようにする。2・3時間目では、生活科の町探検で菅尾磨崖仏に行った時の写真やメモを振り返り、不思議に思ったことや想像したことを話し合う。その際、もっと詳しく知りたいと感じたところに関しては、生活科の時間に調べ、資料を集めることにする。4・5時間目にかけては実際にお話を考える活動に取り組み、主たる評価はこの授業で行うこととする。そこでは、ワークシートを用いて登場人物やその人物のセリフ・行動を具体的に考えることができるようにする。6・7時間目に、それぞれの物語の共通点などを手掛かりに話をつなげ、グループで一つの話にまとめていく。その後の8時間目にはグループで文章の読み合いを行い、誤字・脱字やかぎかっこの使い方、つなぎ言葉が正しくできているかを確認し、加筆修正を行う。9時間目は完成した紙芝居の発表会を行う。そして、紙芝居の心に残ったところやお話のつながりなどについて感想を伝

え合う。なお、完成した紙芝居については、図書室に置かせてもらい、全校のみんなにも読んでもらえるようにする予定である。

導入時の、外部講師による「菅尾磨崖仏の鬼伝説」の読み聞かせを聞くという活動は教科融合的である。「1学期に、神話や伝承・昔話について学習したことを思い出させ」という記述からは年間を通した学びとなっていることがわかる。2・3時間目では、生活科の振り返りが国語科において行われている。これも教科融合的な現象である。その後の「登場人物やその人物のセリフ・行動を具体的に考える」、「誤字・脱字やかぎかっこの使い方」、「つなぎ言葉」は国語科特有の学びである。カリキュラム上は、生活科との横断的構造となっているが、単元内においては、国語科と生活科が融合的に展開されている。

○第6学年・国語科（人を動かす防災ポスターを作ろう）

本単元では、自分の身近な家族や地域の方々に対して、災害対策の重要性を伝えるメッセージをポスター形式で表すという言語活動を取り入れる。ポスターは、見出しや短い文、具体的で説得力のある図表やグラフなどを活用し、伝えたいことを効果的に伝えることが出来るといった特徴がある。そこで、インターネットや書籍で調べた複数の資料を関連づけることや、資料から引用したりすることにより、目的に応じて表現を工夫することをねらいとする。この資質・能力は、委員会活動やなかよし班活動などほかの教育活動にも生かしていくことができると考える。また、情報収集の段階では、ゲストティーチャーとして、ジオパーク推進協議会から防災の専門員に来ていただき、豊後大野市の自然災害や防災についての話を聞く。本単元の導入前には、5・6年合同の総合的な学習の時間で「ジオパーク新聞」作りを行う。多くの情報をまとめ、伝えることの難しさを子どもに感じさせるとともに、表現の工夫の重要性に気付かせておく。また、4年生が作成した「6年生新聞」を参考にして、見出しやレイアウト、構成の仕方から「読み手に伝わる表現の工夫」について考える機会をもつ。

この単元では「防災」を素材にした国語科の学びが展開されている。この内、「インターネットや書籍で調べた複数の資料を関連づける」、「資料から引用したりする」、「目的に応じて表現を工夫する」などの内容は国語科で身につけるべき資質・能力である。導入時における「防災についての話」は、国語科の単元内で行われているため、総合的な学習の時間の内容と融合的であるとみなせる。そして、5・6年合同の「ジオパーク新聞作り」は、国語科の単元に先んじての学びであるため、横断的である。

Ⅲ 省察

本稿では、「ジオパーク学習」（総合的な学習の時間、生活科）を中核に据えて展開された「国語科」、「理科」、「英語活動」の具体について報告した。本稿における一連の報告によって、「教科横断性」と「教科融合性」の差異が見えてきたことと思う。

一般に、「融合」という語は「融け合って一つのものになること」を意味するために、「国語

科と生活科の融合的授業」と表現してしまうと、どちらの教科の授業なのかがわからなくなる。学校は学校教育法施行規則に定められる「各教科の授業時数」を無視することができないため、カウントの区別が曖昧になる「教科融合」という術語は現場にはなじみにくい。そうした学校文化に対して、本稿は、教科横断的な単元の内部に教科融合的な現象が起きていることを指摘した。各校においては、積極的に教科横断的な授業を構想し、教科融合的な現象を引き起こしてほしい。

今回、授業者の自由な発想を重視したことで、教科と教科の組み合わせ方にはいくつかの類型があることが見えてきた。例えば、第2学年の生活科と国語科の実践は1つの教科と1つの教科を結び付ける単線型の横断であった。そして、第3学年と第6学年は複数の教科を一つの教科に結び付ける統合型の横断、第4学年は前景・背景型の横断、第5学年は、共通テーマに対して、それぞれの教科の持ち味を生かす教科分担型の横断であった。当然のように、どれがよいということではなく、学習者の実態や教育環境に応じて、適宜、使い分けていくべきものである。また、現時点では、この教科融合という現象は偶発性を含めて考えるべきだとも考えている。もちろん、意図的・計画的に可能になる部分も多い。しかし、教育の最前線に立つ教員であれば理解できるだろうが、「思いも寄らぬ子どもの姿」というものが必ずある。それを保障する上でも、教科融合という現象は幅のある理解に止めておくべきだろうと考えている。

重要なことは、子どもの学びは大人が定めた区切りで行われていないということである。子どもたちにとって、「ジオパーク学習」、「国語」、「社会」、「遠足」などの区切りはない。さまざまな場面で「この石は水で削られたのかな」、「大野川で大水がでたら、土地の低い宇対瀬は水につかるかもしれない」、「もしもの時に、逃げる場所や逃げ方を家族で確認したよ」等、教科に捕われない新鮮な発言が多く聞かれた。今では、子どもたち自身が「単元を通して自分は何ができるようになったのか」、「単元を通して自分は何を理解したのか」、「学びを生かすため、これから自分は何をすべきなのか」など、単元を通じた学習の振り返りが出来るようになっていく。こうした学びの転移性を確認できたことも本研究の成果である。

併せて、今回の菅尾小学校の研究によって、ジオパーク学習と「相性の良い教科・領域」と「相性の良くない教科・領域」が見えてきた。参考として記載する。

【相性の良い教科・領域】

国語（特に、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」）

社会（特に、3・4年の地域に関わる部分、5年の産業、6年の歴史）

理科（特に、4年「地面を流れる水のゆくえ」、5年「流れる水の働き」、6年「地層」）

英語（特に、ジオパークや地域に関わる単語、単元最後のプレゼンテーション）

道徳（特に、「郷土愛」、「自然愛護」）

図工（特に、風景画やデザイン、ポスター等）

【相性の良くない教科・領域】

理科（地質を突き詰めていくと小学校教員の手には負えないほど高度になる。）

体育（「表現運動系」に活用できなくもないが、難しい。他領域は特に難しい。）

算数（「数と計算」、「図形」、「測定」、「変化と関係」の教材化が難しい。）

音楽（「音楽作り」に活用できなくもないが、難しい。「歌唱」「器楽」は特に難しい。）

上記の「相性の良くない教科・領域」も、菅尾小学校におけるジオパーク教育と相性がよくなかっただけであり、他の「郷土教育」、「キャリア教育」といった別のテーマにおいては多様な教科横断性・融合性を発揮できるはずである。また、必ずしも、教科横断・融合的な学びだけが優れているわけではない。学習者、地域の実態、教科内容等によって、適宜、柔軟に考えていくことがとりわけ重要であろう。

IV おわりに（展望）

本報告に関わる研究は 2018 年度に始まっている。これまで、菅尾小学校は「キャリアプランニング学習」、「郷土教育」などを掲げ、教育行政が求める社会に開かれた教育課程作りに努めてきた。そして、2021 年度には「おおいた豊後大野ジオパーク」（日本ジオパーク認定）を学習素材とし、教科横断的な教育課程作りを進めている。今や菅尾小学校の実践は全国レベルをステージに展開していると言っても過言ではないと思っている（注1）。

今後の活動については、安易に「より一層の推進」というキーフレーズを使うべきではないと考えている。学校に集う子どもも教職員も年度毎に変わっていく。その時々状況に合わせて考えていくべきことだろう。また、「本報告に倣い、他校においてもジオパーク教育を」と言うのも軽率であると考えている。教育は多様であるべきである。各校においては、それぞれの方法で研究を進めていただきたい。菅尾小学校の取り組みがその一助になれば幸いである。

謝辞

本研究を進めるにあたり、豊後大野市教育委員会からの指導・助言の他、おおいた豊後大野ジオパーク推進協議会からはおおいた豊後大野ジオパークについての直接のご指導を賜った。記して感謝申し上げます。

附記

本報告は豊後大野市立菅尾小学校（校長 衛藤俊明，研究主任 釘宮泰代）にて実施された「公開研究発表会」の資料を元に、花坂・河野が衛藤・釘宮と協議を重ね、大幅に割愛・修正したものである。その内、「Ⅲ 省察」の一部と「Ⅳ おわりに（展望）」の多くについては花坂・河野の私見である。また、本研究報告は同名のⅠと対を為す。カリキュラム構想の全体像についてはⅠで、授業実践の具体についてはⅡで報告している。2つは着眼が異なるだけで1つの研究である。そのため、総論である「はじめに」と「おわりに（展望）」については各稿、重複させた。

なお、本研究は JSPS 科研費 JP19k02735 及び JSPS 科研費 JP21H00868 の助成を受けての成果である。

注

- 1) 去る 2022 年 1 月 28 日に「おおいた豊後大野ジオパーク」は日本ジオパークとしての再認定を受けた。その認定理由の一部に、「域内の学校におけるジオ学習やガイドの会の活動が活発に行われ、道の駅など協定を結ぶフレンドショップとの連携が進むなど、ジオパーク活動が地域に

根づきつつある」とある。菅尾小学校はその「域内の学校」として唯一の視察を受けている。

参考文献

- 1) 及川幸彦（編著）・大牟田市 SDGs・ESD 推進委員会（著）（2021）『理論と実践でわかる！SDGs/ESD 持続可能な社会を目指すユネスコスクールの取組』明治図書出版
- 2) 田中治彦・奈須正裕・藤原孝章（2019）『SDGs カリキュラムの創造 ESD から広がる持続可能な未来』学文社
- 3) 花坂歩・衛藤俊明・釘宮泰代（2021）グローバル人材の育成を目指す小規模小学校の挑戦：地域の教育資源を活用したキャリア教育実践の報告，『大分大学高等教育開発センター紀要』, 13, 157-166

（資料 1） 校内の全教員に配布した指導案サンプル

第6学年国語科学習指導案

2021年6月30日(水)第3校時
指導者 釘宮 泰代

1 単元名 人を動かす防災ポスターを作ろう（書くこと領域）

2 単元科との関連
【総合的な学習の時間（ジオパーク学習）：豊後大野市の防災について考えよう（8時間）】
【社会科：自然災害を防ぐ（3時間）】

本校では、地域素材を生かした郷土学、特に「ジオパーク学習」に力を入れている。9万年前の阿蘇火山大噴火による火砕流がもたらした豊後大野の大地、そしてそこで暮らしている人々の歴史や文化について、総合的な学習の時間を中心に学習を積み重ねてきている。

豊後大野市はその地質の特徴から、風水害や土砂崩れ、地滑りなどの自然災害が多く、今後もそのような被害が起こるだろうと予想される。自然災害を防ぐことはできないが、その被害を最小限にとどめるための取組が重要である。災害から命を守るための正しい知識をもち、十分に備えておく必要がある。

そこで、**ジオパーク学習では、ジオサイトをめぐって豊後大野の地質の特徴を豊後大野市の防災・減災について、ゲストティーチャーを招いて話を聞いたり、防災マップを活用して避難経路を確認したりする活動を行う。**さらには、**社会科で地域社会の課題解決と政治の関わりを学ぶことにより、災害に対する当事者意識をもたせていく。**加えて、**国語科では、ジオパーク学習や社会科で得た「防災・減災の知識や情報」を活用し、自分たちで調べたことをまとめて「防災ポスター」として地域へ発信する活動へつなげる。** ← **教材としての扱い方を書く**

「災害」をテーマにした学びはこれからを生きる子どもたちにとって必要不可欠なものである。ジオパーク学習と社会科、そして国語科を関連させて教科横断的な学びを実現させることを通じて、**地域（ジオパーク）と自分との関わりについて自分なりにとらえ、これからの地域や自分のあり方について考えを深めるだけでなく、豊かな人間関係を築くことができる子どもたちに育ってほしい**と考えている。 ← **めざす子ども像を書く**

3 単元の目標
「4 単元の評価規準」の重複が多いため、省略

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
情報と情報との関係付けの仕方を理解し、資料を効果的に使っている。(2)イ	引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。B(1)エ	自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫してポスターにしようとしている。 言葉がもつよさを認識するとともに、国語の大切なことを理解して、思いや考えを伝え合おうとする。

評価の方法：行動観察・ワークシート・振り返りシート

5 本単元におけるジオパーク教育の視点

子どもの願い	指導者の願い	地域の願い
<ul style="list-style-type: none"> ・家族の命を守りたい ・避難経路を知りたい ・地域の防災を知りたい ・地震について知りたい ・楽しく学習したい ・知ったことを伝えたい ・知りたい！見たい！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災、減災について当事者意識をもつてほしい ・豊後大野の地質や自然と関連させて身近な問題として考えてほしい ・主体的に学びせたい ・深い学びにつなげ、各教科へ広げたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域防災力の向上 ・防災拠点での町づくり ・自防・共助の推進 ・大野川水害対策 ・土砂崩れ対策 ・避難訓練の充実 ・リーダーの育成

↓

豊後大野が知りたい！大好き！ほこりに思う！人・もの・コトが大切！

6 指導の立場

○**発着報**
名称

○**単元報**
本単元では、自分の身近な家族や地域の方々に対して、災害対策の重要性を伝えるメッセージをポスター形式で表すという言語活動を取り入れる。ポスターは、(以下略)

○**転着報**
本単元の導入前には、5・6年合同の総合的な学習の時間で「ジオパーク新聞」作りを行う。多くの情報をまとめ、伝えることの楽しさを子どもにも感じさせるとともに、(以下略)

7 単元デザイン
名称

8 本時案 (O/O)
名称

9 成果と課題

○ポスターを発表する個と個との対話がよくあった。うなずきながら、付箋にアドバイスを書いていた。

○発表する個が、個々のタブレット端末にポスター画像を送ることで、拡大機能を使って細かい部分を見ることができた。細かい部分の表現の工夫に気づき、付箋に的確なアドバイスを書いていた。

○「柱状図はもろく崩れやすいこと」や「支流の多い大野川は氾濫しやすいこと」等、これまでのジオパーク学習で得た知識を活用した発表及びアドバイスが多く見られた。

▲**板書とICTの連携はどうしたら良いのか？**難しい、出てきた意見を板書に書くのがいいかも。

← **「教科の指導」を振り返る目と「ジオパーク学習」を振り返る目の2つの視点をもって、成果と課題を考える。**

Development of a Cross-curriculum that Creates "Tradition" and "Creation" II :

Consideration on Subject Fusion Caused by Crossing Subjects

HANASAKA, A., ETOU, T., KUGIMIYA, Y. and KOUNO, S.

Abstract

Sugao Elementary School is working on the development of cross-curricular lessons utilizing geosites. In this report, we took up the teaching plans from the 2nd grade to the 6th grade, and examined their cross-curricular and inter-subject fusion. As a result, we confirmed that cross-curricular was part of curriculum management. Then, we came to the hypothesis that subject fusion is an accidental phenomenon created by crossing subjects. In addition, we proposed "subjects that are compatible with geopark education" and "subjects that are not compatible with geopark education."

【Key words】 cross-curricular, Geopark education, Curriculum management